

## K-5 東松島市宮戸月浜地区 2013年1月13日(日)~16日(水)

---

報告者名	大沼 知	被調査者生年	なし
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	なし
補助調査者	大沼 知	(参与観察調査のため被調査者の情報なし)	

---

以下は、えんすのわりの参与観察による記録である。1月13日から1月16日にかけて調査を行った。

### 2013年のえんすのわり

2013年えんすのわりも例年通り、1月11日から16日にかけて行われた。メンバーは昨年と変わりなく、小学6年生を大将、小学5年生を副大将、小学4年生を三番大将として、3で行われた。参加年齢が昨年から高校生までと上限が引き上げられたが、現在月浜を出て仙台や矢本にいる高校生もあり、月浜に残っている高校生も部活動や授業の終わる時間の関係で、行事全てには参加できないという状況から、顔を出せるときに参加するという形式になっている。ただ、行事に参加するといっても、小学生と同様にお籠りをするのではなく、囲炉裏の火を焚いたり、一緒に遊んだりしながらどうやったら行事を円滑に進行することが出来るかといったアドバイスを送ったりして、ご飯を一緒になって作ったり食べたりするという機会は少なかった。それでも今年は11日から14日がちょうど休日に重なる年であったため、月浜に住んでいる高校生の1人はほぼ毎日夕方のお籠りに顔を出していた。

お籠りの間は岩屋の外から小学生の母親達が様子を見守っており、朝5時前には子ども達を起こしに就寝場所の談話室へ行き、岩屋で朝食を作って食べ終わるまでほぼ付きっきりであった。朝は子ども達も眠さのせいもあって行動が遅く、その度に母親達が食器の洗い方や片づけ方だったりを指示して面倒をみていた。朝は岩屋には7時から8時くらいまでは居て、その時間で食事の後片付けまでできるように声を掛けたりしていた。子ども達は、行事期間は長く一緒に居ることができるので、ずっと遊んでいられる機会として行事を楽しんでいた。

平日で学校があるときのお籠りは、朝3時頃に岩屋に入り、食事をして6時には岩屋から出て家に帰り、そこから一眠りして学校へ行き、学校が終わって17時頃から再び岩屋に集まり、夕食を食べて20時には岩屋を出て談話室でみんなで寝るという形であるが、今年は行事期間中の休日が多かったため、朝は5時過ぎに岩屋に集まり、朝食を終えると11時ころまで家に帰らず遊んだりしている時もあった。お屋前にはいったん家に帰り、夕方15時ころに再び岩屋に集まり、夕食を済ませた後、20時ころまで岩屋の中で餅を食べたり遊んだりして時間を過ごしていた。お籠りの様子取材にきた新聞社やテレビ局のインタビューにも慣れた様子で対応し、「行事を続けることで月浜の復興に役立てたい」と答える場面もあった。

14日は行事の本番であり、子ども達はマツノキと呼ばれる自分の背丈ほどの先端を削った棒をもち、仮設住宅一軒一軒を唱え言を唱えてまわって歩く。その時に後ろから高校生と一緒に付いて歩き、唱え言の合いの手やご祝儀の運搬、各家に対する祝いの唱え言の指示を出したりする。18時ころになると岩屋の縁にロウソクをならべ、火をつける。囲炉裏の火も点いたままにし、子ども達が岩屋にいない間は、父親や祖父であったり、とにかく男性が入ってヒノバン（火の番）をする。火の点いたロウソクの芯が無くなってくると、縁から取って囲炉裏にくべる。ヒノバンは子ども達が岩屋に戻ってくるまで囲炉裏の火を絶やさないよう管理する役目である。行事に参加している子どもの親や親族でなければいけないという決まりはなく、男性であれば誰でもやれる。

この日は大雪となったが、予定通り行われることになり、子ども達は19時になると岩屋を出て、マツノキを持って神社へ向かう。高校生も一緒に上がって社殿を前に小学生は1列に並び、その後ろに高校生3人が並んで、高校生の「せーの」の掛け声で唱え言をうたい始める。マツノキを地面に突きながらリズムをとって、「えーい、えーい、えーい えんすのわりとうりょうば（意地の悪い鳥を追って）、かーすらわってすをつけて（頭割って塩つけて）、



写真1 岩屋でのお籠り



写真2 仮設をまわる様子

たーどーがーみさ、たーたみーれて（タトウ紙さ畳んで入れて）、えーどがすんまさ、なんがせ（蝦夷が島さ流せ）、えーい、えーい、えーい」とうたう。これを3回セットとしてうたい、終わると、高校生の「せーの」の掛け声で子ども達が「おかはまんさく（陸は万作） うみはたいりょう（海は大漁） じにのかねはらめ（銭と金孕め）」といって締める。同様のことを天王様、観音様、秋葉様の順に行う。それらが終わると、家屋の残っている家4軒をまわり、そこから仮設を一軒一軒まわった。子ども達が来ると家の人達はご祝儀と米ないし餅を用意して玄関に座して待っており、子ども達は玄関前に1列に並び、「えーい えーい えー（い）…」の唱え言をご祝儀の数に合わせて唱え（ご祝儀1つに対して3回唱える。2つある場合は6回となる）、それが終わると「民宿をやる予定はありますか?」、「海苔やっていますか?」などと聞き、それに対し、「やる」という答えがあれば「民宿繁盛するように」、「海苔大漁するように」と唱える。その他にも「商売繁盛するように」や「じいちゃん、ばあちゃん達で長生きするように」などがあり、「震災復興するように」は全ての家で言われた。

途中で仮設の月浜公民館で、震災後、月浜を出た1軒の家の当主がこの日のために来ており、そこで同様に唱え言を唱えて祝った。それが終わると次は今年新しく出来た海苔養殖の加工工場に行った。海苔養殖グループ『月光』のメンバーが工場に待機しており、これも同様に唱え言を唱えて祝った。

仮設をまわる順番は昨年と同じであったが、海苔養殖の工場と民宿を再開した家が1軒あり、この2つを新しく順番に組み入れてのまわりかたであった。震災後の家のまわる順番はえんすのわり保存会会長が決めていて、その順番を記した紙を高校生に持たせて、高校生はその順番に従って小学生を誘導する。

全ての家をまわり終えると、海岸に向き、3人が約10メートルほどの間隔を空けて1列に並び、海に向かって「えーい、えーい、えーい…」の唱え言を何回もうたう。これは主にOBの人達から声出しと呼ばれていて、高校生達は小学生に「もっと声だせー」などと言って大声を出させる。約5分ほどどうたい続けさせ、高校生の「もうやめ!」の声で終わる。そして岩屋に戻りしばらく取材のインタビューなどを受けて、後片付けをしてこの日を終える。

次の日15日は14日にももらったご祝儀をえんすのわりに参加した子ども達に配る日で、これには保存会会長の立ち合いのもと行われる。子ども達はご祝儀の入ったバッグをもって保存会会長のもとへ向かい、そこでご祝儀袋から現金を取り出して合計金額を数える。その金額から3人にお金を分けるのであるが、学年ごとに10円の差額をつける。また行事中に顔を出した高校生や14日にサポートとして駆けつけた高校生のぶんもご祝儀の中から出される。計算が終わるとそれぞれお金を持って帰り、また高校生の取り分のお金を持って、当人に渡しに行く。また、ご祝儀の時にももらった米は1軒の家に売りにいき、お金に換えてそれをまた3人で分ける。差し入れのお菓子も3人で分けて、お神酒などは水道を借りていた1軒の家にお礼として渡す。

行事の最終日である16日は、神社でホイホイと呼ばれる鳥追いを行う日である。朝5時ちょうどに子ども達は母親に起こしてもらって神社に向かい、正月飾りの切り紙を、竹竿の先端に付けた竿を大将が持ち、1列に並び「ホイー ホイー ホイ…」と言いながら神社の外周を4周まわる。これが終わると行事の一切が終了し、子ども達は家に帰る。

この日は学校がある日だったので、岩屋の後片付けは学校が終わってから行うとのことであった。また、14日の家をまわる際に、1軒の家で不幸があり、その家は14日にまわることなく、日を改めて19日に行うとのことである。



写真3 ご祝儀の分配



写真4 ホイホイ